



No.23 (通No.102) 2020年8月7日

# てつがく なかにわ リーズレター 哲樂の中庭 2020年立秋

仕事をこえて、さまざまに考えをめぐらせ、それをまた仕事にいかすアプローチ

## 『上がダメでも市民で勝つ』

### オードリー・タン

“この人か…”。7/22付日経の「挑戦者たち」で取り上げられた台湾のデジタル担当相「オードリー・タン」、1981年生の39歳。

世界に「コロナ」感染が広がり、各国のリーダーシップが取り沙汰された頃、日経紙面で、「台湾では若いデジタル担当相が…」と、羨望の眼差しのような記事が印象的でした。

プロフィールによると、知能指数の測定は限界を超え、両親がジャーナリストだからか、自身の「天才性」を惜しみなく公益に資して、性別への葛藤が深かったよう。写真の表情はなんとも柔和で、広隆寺の菩薩さまを彷彿

滲出した世に、ときどき、天から送られたような人が現れるものです。

### よりパーソナルに

with コロナ。美術館や博物館が予約制になったのは嬉しい。音楽のコンサートでは、ITと融合した新しいカタチが試行されるとか。働き方、学び方以上に、遊び方の新しい常態にユニークなものが出てきそうです。

急速に利用が広がったオンライン会議、なんとも便利ですが、あらためてオフラインの「打ち合わせ」を再認識。「3密」はダメだから、これからはごくごく限られた人数または一対一で、「親密」に対話、議論、交流。

より、より、パーソナルな対応に意味が出てきそうで、「パーソナル・アシスタント」として、右記の「市民」たちへの鋭押しもしっかりできるよう、さらに精進を重ねなければと思っている今日この頃です。

LEE'S (リーズ)

〒530-0012

大阪市北区芝田2丁目8-15

北梅田ビル35号

リー・ヤマネ・清実

Lee Yamane Kiyomi

最後は勝つ。上がダメでも市民で勝つ。

日経7月21日朝刊の見開き両面をつかった宝島社の(意見?)広告は、なかなか鮮烈でした。ご覧になった方も多と思います。文字ばかりの紙面の次を開いた瞬間、パッと目に迫る「バンクシー」の『花束を投げる男』。

メッセージ文がまた奮っています。いわく、「この国の強さは市民にある」。「市民」を辞書で引くと、「近代的社会を構成する自立的個人」。

「自立的」は、「自律的」でもあるはず。組織の論理で動く組織人ではなく、あくまでも社会の一構成員として自分はどうあるべきかを考える。

「難題を乗り越えるのは、いつだって最前線の人間だ」。そう、ソーシャルビジネス、コミュニティービジネスの起業家たちにそれを感じます。以前、寄稿を頼まれた時、そう書いたものです。

### 見聞感考 | 『スペイン下宿』に映る巡礼者たちの“たたかい”

間くところ、『愛の不時着』で韓国ドラマに初めてハマった人が増えたとか。ケーブルでやるようになれば見てみたいと思いますが、バラエティーもなかなかおもしろいものが多く、7月にLaLaTVで放映された『スペイン下宿』にすっかりハマりました。

料理好き、DIY好き、片付け好きの有名俳優3人が巡礼路の小さな町にある歴史的な修道院で巡礼者たちをもてなすというもの。韓国からの巡礼者が多いそうで、ロケーションが決まったよう。

見ものは3人の得意分野の発揮とそれぞれの個性に応じた掛け合いなのですが、それと同じくらい、巡礼者たちそれぞれの人生の一コマに、ほろり。

画面に映る時間はわずかですが、「コンシェルジュ」を担当した個性豊かな「ユ・ヘジン」が、実にいい感じで彼らから話を引き出します。

「自分で考え、自分で動け」。どんな場合もこれにつきます。よりよく考えるために、精神の糧、良質な情報を蓄えなければいけません。が、「フェイク」が巧妙さを増す昨今、接する媒体を制限するのも一つの方法。

さて、『この国の強さは市民にある』。たしかにそうだろうと思います。海外でもそう評価されていると聞きます。

ただ〈連携〉には弱い。個々人は動く。高い能力、技術を持っている、でも、補完しうる他の「市民」に働きかけるのは、控えてしまう。自分が言い出しっぺになるのを億劫がる。率直なコミュニケーションを躊躇する。

これらの短所をカバーするほど「市民」単体が奉仕精神を発揮しているのもまた日本ですが、今回の世界的歴史的事態によって、その奉仕精神をもう少し分散させて、裾野でもっと広く、密にならなければと思う8月立秋です。

「歩いている間は、悩みを忘れられるんです」とは20代半ばの男性。指をケガしてピアノを弾けなくなり教室を畳んで巡礼に出たという60代半ばの女性。

スウェーデン、フランス、イギリスなど、各国の巡礼者たちも泊まり、100km歩き詰めで深夜に着いたイタリア人熟年男性は固まった体を受付の椅子におろすのもやっとな。シェフの「チャ・スンウォン」が大急ぎで夜食をつくり、ようやく空腹を満たした巡礼者。翌朝にはまた暗いうちに出発。巡礼はこれで4回目というのに、何故そこまで…。

“自問自答”、そんな感じさえますが、国籍も年齢も様々な巡礼者たちが、途中で出会い、互いの“自問自答”から自身の自問自答へつながっている様子も見えました。さて、わたしはこれでいいのかしらと、テレビの画面越しに彼らから問われた気がします。